

『現象と秩序』第20号記念号によせて  
—10年間の途筋—

堀田 裕子（摂南大学 現代社会学部）

本誌が誕生して10年が経ち、第20号発行を迎えることができた。第1号から第10号までの間には58本の論考が、第11号から第20号までの間には52本の論考が公表されてきた。総論考数は110本、著者・翻訳者数は延べ64名に上る。

この10年の間に、2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標」(SDGs)は、あらゆる場面で声高に叫ばれるようになり、「多様性」(diversity)を重視する社会意識も急速に高まった。また、2020年初頭からは、新型コロナウイルス感染症が世界中の人びとを巻き込み、WHOのPHEIC(国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態)指定は2023年5月に解除されたが、ウイルスは変異し続けており、今もなお人類への脅威であることに変わりはない。2022年に始まったロシアのウクライナ侵攻および2023年に始まったイスラエルのガザ侵攻は、今現在も沈静化する様子はない。

日本国内に目を向ければ、2019年に「平成」から「令和」へと元号が変わり、新しい時代への期待が高まった。だが、平成の幕開けとほぼ同じくして社会に蔓延し始めた行き詰まり感是不変。進まない男女共同参画、止まらない少子高齢化、そして長引く不況。今年、元日から胸を痛めざるを得ない出来事にも見舞われた。お世辞にも、明るく希望を持てる時代などとは言えず、人びとの生きづらさは慢性的なものとなっている。

そんななか、私たち社会科学系の研究者は何を為し得るだろうか。私たちの存在意義はどこにあるのだろうか。ずっとそのことを考えていた。

個と自由と多様性が強調され、それが少なくとも現在の日本ではなかば強迫的なかたちで人びとの行動規範となっている。そして、それに呼応するかのようになり、近年の社会学研究はカタログ的な拮据を見せつけている。社会学では現状を記述し、何が起きているかを人びとに伝えることがその役目の一つである。だが、私たちはジャーナリストではない。ジャーナリスティックな関心と社会問題への“感想”を超えて、人びとが語ってみせることばの裏側や、ことばにならない、あるいははしないままにされていることに目を向け、その現象のもつ秩序を分析することこそ、私たちの使命なのではないか、と思う。

個々の現象が発生する現場には、固有の秩序がある。その秩序に目を向けずに現象だけを追うことは、当の現象を、研究者のもつ知識と視点で秩序立てて見るにすぎないことになる。また、こうして研究者コミュニティに取り込まれた現場との関係は、“ある種のオーバーラポール”を発生させ、批判的視点を失わせることもある。やがて研究結果はひとり歩きして秩序との齟齬をつくり出し、生きづらさを加速させる片棒を担ぐ可能性もあるだろう——このようなことを思い連ねる。同じ種がどこでも同じ花を咲かすわけでは

ない。今こそ、現象と秩序とを往還する思考で、社会の「現実」を明らかにすることが求められているのではないか。

第 12 号には本誌初の英語論文が投稿され、D.Maynard の論文 2 本と David E. J. Purdue and P. David Howe の論文の翻訳と訳者解説、また、研究ノートや実践報告も掲載された。

この 10 年の間に計 8 回おこなった投稿規定・執筆要領の改訂も、Web と紙とのハイブリッド形態で多様な分野の論考を掲載しようという本誌ならではの難路の軌跡である。2022 年 3 月には、オプトアウト機会の保障の公示をおこなったが、小規模運営だからこそこの問題の一つであると言えよう。

本誌は、査読者の選定とその依頼、編集、校正、印刷、発送までの全過程を、編集委員と編集協力者が担っている。いまだ“手作り感”溢れる雑誌ではあるが、こうして 10 年にわたり曲がりなりにも継続してこられたのは、歴代の編集委員と編集協力者のおかげである。ここに感謝の意を表したい。

第 30 号を迎える頃には、SDGs の目標達成期限である 2030 年を目前に控えている。その時、持続可能で生きやすい社会が到来しているだろうか。多様性を——受容ではなく——自明視する社会が形成されているだろうか。いや、そうした社会を築く一翼を担っているのだと、私たちはいま一度強く自覚すべきであろう。そして本誌が、そうした志を持つ研究者たちの意欲的な論考の集まる場として、さらに発展することを祈念して筆を置きたい。

\*\*\*\*\*

【編集後記】『現象と秩序』第20号記念号をお届けします。第1号の刊行から9年半、準備期間を入れると、ほぼ丸10年になります。慣例により、総目次（発行順、著者名順）および、振り返り記事を掲載しました。振り返り記事の前半は堀田委員長が、後半は読者代表として松繁卓哉先生が書いて下さっています。どちらも力作ですし、一種の社会評論となっています。まずは、巻頭からお読み下さい。

本誌は「ハイブリッド」誌ですので、WEB上で容易にバックナンバーをご覧頂けます。本号の「総目次」を見ながら、気になった論文をザッピングしてみるのはいかがでしょうか（インターネット上では、カラー写真はカラーのまま掲載しています。きれいですよ）。

関連して、「ニュース」です。国立国会図書館は、2013年7月以降、インターネット上の逐次刊行物も法規に則って収集しており、その無料公開もしています（収集は「オンライン資料収集制度」として実施しており、公開は「国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）」内で行っています）。『現象と秩序』誌もすでに収集対象となっており、現在は、国立国会図書館の館内限り公開ですが、近日中に、無制限一般公開になる見込みです。本誌が公開に使っている@ニフティのサーバーが停止しても、こちらの国立国会図書館での公開の方は継続され続けますので、お心覚え頂ければ幸いです。

本号には、通常原稿も4篇が掲載されています。通訳が専門職として如何に高度なコミュニケーションを実践しているかを明らかにした飯田論文、落語の語りの比較研究の結果から「江戸の語り手はあくまでも俯瞰した立場をとるのに対し、上方の語り手は話の中にやや参与する姿勢がある」（かも）という不思議な特徴の発見に至りかかっている村中論文、精神障害者の居場所にかかわるモノグラフである遠部ほか論文、『走れメロス』の読解に社会学を積極導入しようとしている樫田論文、と今回も興味深い論文が集まりました。面白いと思った論文には、ご感想など頂戴できればうれしく思います。どうぞ今後も倍旧のご交誼を賜りますようお願い申し上げます。（Y.K.）

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2023年度） 編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）  
編集委員：樫田美雄（摂南大学）、中塚朋子（就実大学）、加戸友佳子（摂南大学）  
編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第20号 2024年 3月31日発行

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学 現代社会学部 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 072-800-5389 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848 ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>

\*\*\*\*\*